□随想□

お酒まんだら

朝倉斯道

酒というものを最初に口にしたのは、恐らくおトソだろうと思うが、幾つぐらいの時だったか憶えがない。毎年元日の朝おトソを頂くが、これは一ぱいだけの形式的なもので、私には酒の味というよりも、その盃にいろいろの思い出がある。例えば朱塗の木盃なら、おやじがもらった赤十字社功労のものとか、私がもらったものでは、朝日新聞社勤続二十五年記念、紀元二千六百年記念総理大臣盃、何々博覧会記念といったような数々のものがあり、元日以外には用いようがないので、手当り次第に使ってはいるが、棄てたり焼いたりするには何となくもったいない気がするし、いささか持て余し気味である。金盃もあったが、これは戦時中供出し、銀や錫のものは、あまり好きでないので、皆潰し売りした。陶磁器の盃は、日本酒党だっただけにずいぶん持っていて、酒や肴とともに大いにたしなんだものだが、近年酒が飲めなくなってからは、呑助にくれてやったり、花生と交換したりして、今はなにほども残っていない。大方は、愛玩した徳利とともに台所の棚隅にしまわれたままになっている。飲んでいた時分には、呑助もよく訪ねて来たし、ご用も多かったが、飲まぬとなると訪ねて来る人もバッタリ足が止まり、酒器一切があくびをしている。

◇

盃といえば吉井勇さんを想い出す。昭和七、八年ころと思うが、華族夫人と別れて、佐渡、高知と流浪の旅を続けたころ、神戸に足を止めたことがある。鯉川筋のあごひげの歯医者さんが親友とかで、私どもの夜のたまり場であった三宮境内のおでんや「たぬき」によく現われた。吉井さんはくたびれた洋服のポケットから愛用の盃を取り出して、まことにゆっくりと、余り物をいわず、チビリチビリと飲む。ある時私に「貴族院議員になれと青木（当時の貴族院を牛耳っていた子爵）が勧めるがどうか」ときく。私は「その盃にききなさい。あなたはやはり酒と歌と旅の人ですよ」といった。それから数年後、私のいる北九州に現われた時も、よれよれの背広で、伴の盃をポケットから取り出して「あたしの伴侶はやはりこれですよ」といった。私はその盃を記念にと所望し、代りに先代清水六兵衛の盃を差出したが肯んぜず、私が神戸から九州へ転任になった時富田砕花さんから贈られた色紙―それには「灘は生のうま酒と

ころ忘れても熊襲の甕(みか)に酔ひ痴れなゆめ」と書かれているのをみて「不知火の筑紫の土を踏みにけりこれやむかしのおもひでの土」と書いた色紙をくれた。

◇

私が本当に酒のみになったのは、京都の学生時代からである。それまでは滅多に盃は手にしなかったのであるが、京都の下宿が酒の小売店の二階だったため、酒好きの友だちに飲み倒されて、飲まねばソンだと思ったからである。その仲良き悪友の中には鴨居悠(玲や羊子の父)とか山本修二、三木清なんてのがいる。一番よく飲んだのは三十五歳から四十五歳までの神戸、九州時代。神戸では「たぬき人種」といわれ、林重義、吉岡文華堂、桐山宗吉(当時は阪本清雄)川西英などが仲間で、毎晩三、四軒は飲み歩いた。三宮を振り出しに元町の路次、新開地、花隈、加納町、上筒井。夜忙しくて朝はヒマだとあって「朝閑」と名づけられた。賑やかな紅蓮隊だったが、喧嘩はしなかった。しかし酒に連なるバカ話ならいくらでもある。

◇

歳末のある夜更け。喜多村緑郎や谷崎潤一郎などが行きつけの高級バーへ五、六人で行った。私のふところ(ポケットか)にもらったばかりのボーナスがあることを知っての所業。酔ってふらついた坪井甚喜という洋画のサムライが卓上のコップを割った。バーのあるじが「このコップはフランスの上物、一打の一つが欠けたので弁償して頂きたい」という。むかし西園寺公がフランス留学当時、一枚の窓硝子をわって因縁をつけられ、店全体の硝子をわって度胆を抜いたという話を想い出した私は、残りのコップ十一個をスタンドに並べさせ、横手なぐりに一ぺんにはたき割って、ボーナスをはたいた。その勢いで一行は、チャカホイ節を高唱しながら街を練り歩き、お調子者の今井朝路が立看板を蹴飛ばして交番に引張られた。訊問に対しフランス語で答えたため警官は激怒「英語の判らん巡査と思うか」と一喝したので、みんなが腹を抱えて笑った。大塚赤面子と私が平謝まりにあやまって、やっとゆるしてもらったが、危うくみんなが留置場へ入れられるところであった。

◇

九州では大勢相手の宴会で、ショーチュー攻めには閉口した。生玉子の白味を二個ほど先に呑んで胃壁を防御するスベを知った。還暦の年、急に酒が一切ほしくなくなった。後で胃潰瘍の手術をして、はじめて判ったのであるが、膵臓が癒着していたのであった。今日では盃二はいで人事不省になるから、我ながら不思議である。桐山君や及川英雄君にいわせると、八十歳までの分を飲んでしまっているから、と慰めてくれるが、ジュースの乾盃なんて味気ない。阪本勝さんは、お湯で薄めた日本酒を傾けて「自分で自分がいじらしい」とかこつが、それでもやめられぬらしい。飲み友達ほどいたわり合い頼もしいものはないようである。

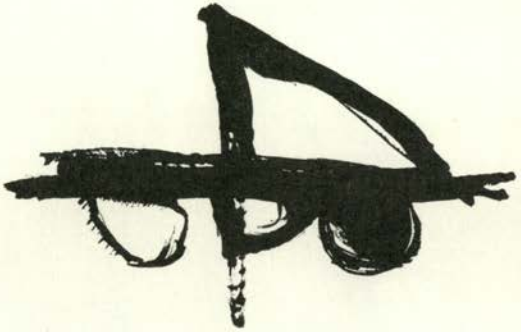
〈神戸新聞社相談役〉

□随想□

飲ん平の寝言

木下　繁

え・津高和一



母里太平の昔ならいざ知らず、いま時、酒を飲んで、褒美を貰ったという話は聞いたことがない。

大体、酒ととという奴は、飲みものの暴君で、こ奴の捕虜になって馬鹿々々しい目に会うことはあっても、ほめられるような行ないが出来るはずがない。

だから、酒を飲むときは、いくらか心に武装してかかればいいが、そんなことをしてまで飲む必要もないので、チョイチョイ失敗を仕出かすことになる。畜生の浅間しさという奴だ。

こないだ同行五人で韓国を訪問したとき、飛行機の中で、美人のスチュアデスに、カムサハムニダ（有難う）と云ったら、馬鹿に親切なサービスをしてくれたので、嬉しくなり、良い気分でウイ公をグイグイ飲んだところ、やり過ぎて、金浦空港へ降りたときは全くのグロッキーになり、その酔いをウオーカーヒルのホテルの朝まで持ち越し、同行の田原社長がいろいろ世話をしてくれて、ドルの両替した証明書を「これは出国のとき必要な書類だから大切にするように」と渡してくれたのにまだ意識がボンヤリしていたのですっかり忘れて、釜山の埠頭で足止めを食いそうになって大慌てに慌てたことがある。程々にせにゃいかん。

「神戸っ子」の酒飲み番附で、三役に推せんされたが、実のところ私の酒量は十両程度のもので、その上飲っ振りに品がない。次の番附会議では、前頭の中位のところまで下げた方が良い、酒豪の名に値する者は他に幾等もいる。

私は、今日まで沢山の飲ん平、酒豪と相知る機会を得たが、中でも印象に強く残っているのは、愛媛県から出ている関谷勝利という代議士だ。随

分前のことだが、彼が運輸政務次官をしていた頃、神戸港の管理移譲で大臣代理として来たことがある。私は、秘書課長をしていたと思うが、山手の菊水で、一夕彼を接待した。

彼は、酒をコップになみなみと注いで、一気に飲みほすこと数十杯に及んだ。会席料理には全然箸をつけず、豆腐を皿に山盛りにして、それに醤油をぶちかけてムシャムシャやる有様は、壮観の二字では表現できぬスサマジイものであった。

彼の話によると、飯は全然食べない。普通の日で朝、昼、晩と、豆腐を肴に一升ずつ平げる。何か事ある晩は二升となり三升となることもあるというに至っては、正に驚ろきであった。こんなオッサンは見たことがない。大鵬級の大横綱だ。

飯なしで、毎日酒ばかり飲んで暮せるサムライは神戸にもいた。汚職でやめた役人だから名前は伏せるが、捜査部長をしていた森田義久君が「大変な人間がいるものだ、留置場で酒を飲ます訳にもいかんし、おも湯ばかり飲ましていたが、そのうち七分粥位は食えるようになり、豚箱生活に感謝していたよ」と云っていたが、別誂えの胃袋を持った人間もいるものらしい。

小唄の文句にもある通り「酒と女」はつきものだが、それは別の機会に譲るとして、「旅と酒」も切り離せぬ強い因縁の糸で結ばれている。

酒のない旅なんて、考えただけでも寒々しい気持になる。

ところがである、私は東南アジアの旅で、酒のない宿で情ない思いをしたことがある。

もう八年位前のことだが、市場調査団の一行五人と東南アジアを約一ヵ月半程廻ったが、香港に始まる旅も終りに近ずき、印度に足をふみ入れたときちょうど大晦日で、暑いカルカッタで正月でもあるまいと、ヒマラヤの雄峰カンチンチンジャンガーの麓の街ダージリンに宿を取って元旦を迎えた。夜明け前に、タイガーヒルというところで新しい太陽を迎え、零下何度かの寒さにガタガタふるえながら宿に帰り、さア正月酒をゆっくりと思って食堂に飛びこんだところ、この土地は禁酒で、アルコールないよときた。がっかりしたね。ジュースでお屠蘇という憐れにも痛ましいテイタラクになって仕舞った。

印度は州によって若干の差はあるが、大部分は禁酒の国である。

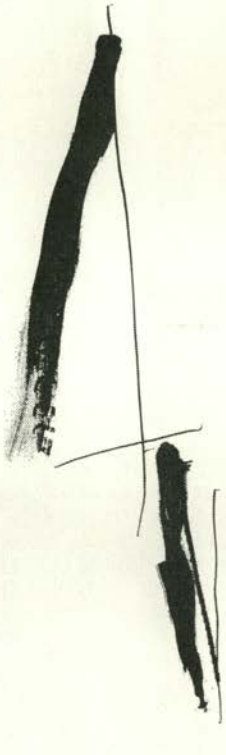
飲めない旅のもう一つは、矢張り印度のマドラスで、ここは商用はなく、単なる中継地であったが、ホテルでビールを持って来いというと、証明書を出せという。何の証明書かと聞くと、アルコール中毒患者の証明書だという。つまり、禁酒の国だから一般には飲まさぬが、アル中患者なら例外として飲ますという訳だ。ケッタイなザル法奴がと思ったが仕方がない。そこで早速、アル中患者になるべくそこら中駆けづり廻って奮闘努力したが、未知の土地で、しかも土曜日ときていたので悲願空しく徒労に帰して、一滴のアルコールにもありつけぬアリサマとなった。ホテルのバーで飲んでいる眼の青い奴等を見ると、癪に触ってたまらぬがどうにもならん。虚しいというより苦しい一夜であった。いろいろのことがあるものだ。

〈兵庫新聞社長〉

□随想□

冬にもビール

古林喜楽　え・津高和一



むかしの日本では、ビールは夏のものにきまっていた。夏はビール、冬は酒というのがおきまりであった。ところがドイツでは、年がら年中ビールである。日本より冬は寒さがきびしい。例年で零下十度である。かって私がいたときのごときは、三十年ぶりの寒波襲来とかで、零下三十度にまでなった。百貨店などには耳当てがズラリと並べて売り出される。人々は重たい目方のかかるオーバーに着かえる。しかしこの酷寒のなかでも、ドイツ人はみんなビールのジョッキを傾ける。というのは室内は二十度位の暖かさであるからである。街を少し歩いていると、こごえてくる。途端にどこへでも飛びこむ。眼がねは曇って、なにも見えなくなるが、やがて上衣をぬぐほどにあたたまる。そとへ出てはとび込み、少し歩いてはまたとび込むということになる。しかしただとび込むというだけではすまないので、ビールを口にするというわけである。零下三十度の酷寒のなかにおいても部屋の中さえあたたかであれば、ビール気分は満喫できる。それどころかこの方が、夏よりはビールがうまいのである。北海道では真冬、ストーブを囲んでのむビールが格別の味だというが、さもあらんと思う。暖房で空気が乾燥するから一層味がでるのであろう。

終戦直後の日本のビール年産五十万石が、今やなんと千万石を突破するようになった。日本でも暖房設備が普及するにともなって、かっての「冬は酒」が通らなくなったからであり、その上女性には酒よりもむいているビールに、女性党が激増したからである。

こんなこととは無関係に、わが家では冬でもビールをのむ。すき間だらけのあばら屋で暖房も貧素とあっては、家の内も外とあまり変らない寒さである。そこで火鉢の上に網をのせ、シュタイン（陶器製のジョッキ）でビールを暖める。ビールのおかんなんて聞いたことがないと人は言うけれども、案外乙なものである。正月の三カ日は千客万来なので、わが家ではビールで年詞の客をもてなすことにしている。酒だとかんをしなければならないので、家のものが参ってしまう。朝の十時ごろから夜の十一時まで、引ききりなしの来訪では無理もないのである。これがビールであれば、瓶をズラリと並べておき、ジョッキをテーブルの上に数十並べ、大きな皿に突き出しを盛ってさえおけば、客は勝手に栓をぬいてビールをのみ、一々かまう必要がなくなる。家のものたちは、千客万来のなかで、ノホホンとテレビを見ていることもできるわけである。客も案外この方を喜ぶ。というのは年詞にまわると、酒また酒の酒ずくしである。丁度そのあとでわが家へ来るとビールがでてくるので、あつらえ向きということになるからでもあろう。事情通の客などは、巡回の順序をきめるときに、わが家をあと廻しにし、渇を覚えたころにわが家につくように、年詞のプログラムを編成している。

正月にビールなんて野暮ったいという人もあるけれども、私のように還暦もすぎた年ともなると、朝の十時から夜の十一時まで、入れかわり立ちかわる客の相手を酒でやっていたのでは、翌日のびてしまうのである。それも一日だけではない。三日間ぶっ通しであり、時には学生の猛者連が大挙して押しかけてもくる。これではとてもたまったものではない。これがビールであると、二十分ごとにトイレへ行くだけで、翌朝はシャンと平日と少しも変らない体調を保つことができる。家内にどれほどのんだだろうかと聞くと、あんただけで一日二十本はのんでいるという。もっともそれに十三時間もかかっているわけであるから、スピードはのろく、ビールを酒のようにチビリチビリとなめているようなものである。その上ひっきりなしにトイレへ通うわけであるから、たださえ少ないアルコールが血液の中にあまり入らないことになる。だから量だけを聞くと、多いように思われるけれども、瞬間をとれば、殆んどのんでいないのと変らないのである。二日酔いなんておよそ縁がないというわけである。

日本人は一般に、酒ののみ方を心得ていない。酒は酔うためにのむもののように思っている。だから禁酒運動がおこったりするのである。酒は百薬の長というけれども、呑みかたをあやまると、百毒、百悪の源となる。のみ方の如何で、薬ともなり、毒ともなる。それではどうしたらよいのかと聞かれると、要するにスピードを調節せよということにつきる。各自自分の体質にあうように、スピードを加減すればよいのである。献盃とか、人にひつこくすすめたり、まだのこっているのにおきつぎをしたりするような悪習は、絶対にこれを廃止すべきである。日本人がみな百薬の長的のみ方を身につけるようになったら、どんなに世の中は朗かになることであろうか。〈神大名誉教授〉

日本販売元

元町バザー

神戸×元町1丁目 TEL (33) 1401・7031

★靴のオーダーメード

◆品質のよい牛皮◆

落ち着いたデザイン

◆みがかれた技術◆

ヨシオカ

神戸大丸前・33／5190・9763

● 神戸っ子放談

神戸の繁栄は神戸っ子が考えるべきだ！

●出席者

玉井　操（神戸商工会議所副会頭・玉井汽船社長）

滝川博司（兵庫トヨタ自動車株式会社取締役・企画調査室長）

橋本一豊（株式会社マツダオート兵庫専務取締役）

★淡路国際空港建設を急げ

橋本　私達神戸JCのなかに今年度から〝地域問題委員会〟が発足しました。趣旨としては今まで経済四団体のなかに入れてもらっていましたが四団体のメンバーとして協力する窓口がなかったので今年はひとつその窓口をつくって、ご一緒にやらせていただきたいと思うのです。そこで先輩として、神戸商工会議所でやっておられることなどいろいろご指導いただければと思っています。

玉井　先輩としてのお話をということですが、私はね、

むしろ皆さんから逆に、一体何をしているんだというような、若い力を吸収したいと考えているのですよ。ご指導という言葉は私達には少々不向きだし、神戸JCでそういうことをお考えになるより、独自の考え方を打ち出されることがいいと思いますね。

過去を無視した現在の生き方でお考えになっていることが魅力ではないですか。今の政治でも同じことがいえますが、やはり七十、八十歳のいいところはありますよ。全部だとは申しませんが、やはり時代にそぐわないという感じですね。たとえば荒船さんがああいう問題を起こしましたね。その昔彼は港湾労働問題が起ったときに、釜ヶ崎へ選挙違反で逃げ込んだことがあるのです。そういう経験があるから、あそこでコモかつぎもやったし、港湾問題もよく知っているんだという話があります。この話を聞いて私たち明治生まれの人間は、面白い経験があるんだなあと思います。ところが昭和生まれの人は、今政治家の清潔ということがいわれているので、選挙違反で逃げたという話は面白くないという見方をするわけです。物事の取り方に差が出てくるんです。ですから、あなた方はつねに新しいものを打ち出されることが一番の刺戟であり、有効ではないかと思います。

橋本　明石架橋問題は今年こそ本決まりの雰囲気だと思うのですが、数年前、故河野さんが明石にとって有利な発言をなさったが、あれは今でも背景として生きているわけですね。

玉井　残っているでしょうね。それで原口市長さんも意を強く持っておられるのですが、書いたものをいただいているわけではないのですから、あのときと事情が変ったのだからといわれてしまえばそれまでですがね。当時の建設相であった河野さんの発言は有効であることには間違いない。しかし、岡山を先にやるか明石にするかということは甲乙つけがたいという状態ではないでしょうか。岡山と明石とをくらべてみると経費の点では岡山の方が数段安くすみますね。

橋本　それが結局、むこうの名儀となるわけですね。

玉井　先日、その筋で権威の方がおっしゃっていましたが、できれば淡路島に飛行場を建設する運動をやって、橋は当然、それに伴なうのだということで、むしろ、そうする方がいいのではないだろうかということでした。淡路島に国際空港を建設にあたって浅田会頭とも話し合ったのですが、万博までに間にあわせたいという伊丹空港の拡張問題があるので現時点では、淡路まで手が回らないのではないかということ。また、千葉県に第二国際空港建設の話が進捗している状態だから、淡路の空港建設問題は手間取るでしょうが、この建設を早くやることが架橋のためにひとつの決め手になるのではないかと思うのですが、あなた方はどうお考えになりますか。

滝川　明石架橋のための手段と考えればおかしいかも知れないが、やはりそれによってプラスの面があるとすれば賛成です。今年はその問題が具体的にクローズアップされる年ということで、今まで経済活動委員会がそういった関係を担当していたのですが、二手に分かれてもうひとつ経済問題委員会というのができました。その経済効果が神戸にとってプラスになるのかどうかという細かいところから考えて、我々なりに四国関係のJCとも手をつないで行きたいと考えています。岡山では反対の立場をとっておりますし、高松でも橋の必然性ということで積極的に働きかけていますが、互いにこの経済効果を主張しあっているわけです。しかし我々としてはその実現を促進するというのが南部新理事長の方針であり、いかにして明石架橋の実現を促進するか、またそれより先に国際空港をいかにして淡路につくるかということに全力をあげたいと思っています。

玉井　技術面とかいろんな面でもすでに調査ずみですよあとは経費の問題ということですね。岡山より金がかかるということで、おそらく国会でも問題になるでしょうが、費用の点で岡山に決定という具合になりかねない。しかし、こういう効果があるんだという説明をするとす

れば国際空港建設問題が一番いいのではないかと考えますね。とにかく神戸からいえば神戸という貿易港に直接働きかけて、一般大衆からも絶対の支持を受けるということが一番大切なことです。

★神戸っ子の手による神戸の繁栄と近畿経済圏のなかの神戸との二本立てで

玉井　運輸省では神戸港も大阪湾という言葉を使っているのです。東京湾のなかに東京港と横浜港とがあるというように大阪湾のなかに大阪港と神戸港があるというわけです。そうすると大阪の方はそれでご満足しておられるが、神戸の方は大阪湾のなかの神戸港だということになればいい気にはなれないだろうと予測されるのです。だからそういうことを一掃して、大阪は大阪、神戸は神戸として、たとえば神戸の場合、コンテナーがまだできない。できないと神戸の港はすたれる。神戸港がすたれると兵庫県がすたれるんだという。それでは考えが小さいのではないかということになるのです。

橋本　一豊氏

滝川　博司氏

橋本　広域行政ということですね。

玉井　その明石架橋の問題で先日大阪の商工会議所と首脳会談をやったのですが、そのとき大阪のある首脳の方が、「玉井さん、明石架橋をかけて神戸はもうかりますか」という質問をしたんです。それには私も面喰らいましたね。明石架橋というものは大体、小さくいえば近畿のために、ひいては日本全体のためにかけるということで神戸市長もいっているわけです、神戸がもうかるからかける、もうからないからかけないということではなく市長の言葉を借りれば、橋によって貿易に直接つなぐのだと、あるいは日本経済全体の、最少限度は関西経済圏におよぼすためにいっているわけですよ。

滝川　数年前、青年会議所でとりあげ、当時の経済活動の委員長が〝近畿はひとつ〟ということで、近畿経済圏として、広域行政面としていろいろ勉強もしてきたわけですが、やはり現実に私達の商売が兵庫県だけに限られているということもあるのですが、兵庫県自体の経済の伸びが他都市に比べてにぶいということ、一方大きな理想のもとでは、それでは神戸は大阪の単なるベッドタウンであっていいのかどうかと両方の問題があると思うのですけれども、大きな問題をとりあげると同時に、神戸は神戸で大阪のベッドタウンであってはいけないのではないかという感じがするのです、神戸にとって問題は小さくなるかも知れませんが、やはり神戸の繁栄は神戸自身で繁栄する道を前進させなければならないと考えたいと思うのです。

玉井　神戸が神戸独自の繁栄策を考えるということは広域経済圏にとってもプラスである。自分たちだけが大きくなるのではなしに全体が大きくなっていく原動力でありたいのです。しかし、神戸独自の発展策、それは大き

なもののなかの一部として考えた方がよろしい。今たとえば山陽新幹線を神戸にとめてほしいと陳情していますが大阪にとまればもういいじゃないかというのが国鉄の意見だったが、それはちょっとちがう。なるほど大きな意味で大阪へ集まればいいかも知れないが、神戸という町から考えると大阪にはプラスにならない。神戸に駅をつくるということは神戸にはプラス、同時に大阪にとってもプラスであるのです。九州・四国の方たちも大阪まで行くのと、神戸で降りるのとでは大きな違いがでてくる。ですから神戸として考えなければならないことがたくさんあるわけです。

橋本　神戸は昔から港を中心に発展してきたわけですが流通センター的な近畿経済圏と瀬戸内圏の接点であるといわれてきました。たまたま橋・コンテナー問題が別の機会にバラバラに盛りあがってきたわけですが、一緒に考えるという点については最近の商工会議所でどういう風にお考えになっていますか。

玉井　コンテナーも開始されて、ほんとの効果がでてくるのは二、三年先のことです。それができた場合でも今日の道路事情ではとても無理なのだ。貨車輸送をとっても同じことがいえる。そこで四国・九州への輸送は船を利用するほかに仕様がないという考え方です。架橋ができればいいが、市長もその点で大きな流通のためだといっておられる。だから単に神戸がいいとか悪いとかではなしに、近畿経済圏のスムーズな流通が可能であるわけだ。架橋とコンテナーとは非常に密接な関係があるので当然だが、ただちに私たちはコンテナーの機能を発揮できるかどうかを今研究しています。弱電関係の製品なら二十五トン位の国際共通のコンテナーに積んでニューヨークへ回せる。ところが神戸からでる雑貨の場合はニューヨークへ持って行ってそのまま渡せる荷物ばかりかといえばそうではないのですね。向うへ着いて分けなければならないというのが非常に多く、たいへんめんどうなわけです。さらにむこうに着いて小さなコンテナーに移す場合、はたしてコンテナーの荷造りでいいのかどうかという問題など輸出用コンテナーのあり方については問題が多いのです。金もかかるし、二、三年の間は研究時代であるといえますね。どうしてもやらねばならないことだが、現在の荷主関係にマイナスを与えてはならないのです。運賃が安いとか荷造りが簡単だとか、なにかプラスにならなければ荷主はやりませんね。現在の船会社もプラスでなければ赤字を出していてはなんにもならないのですからね。昨年の春から急速に持ちあがった話ですが、無論日本の道路事情では時期尚早といえたが、大体、もっと早く日本でとりあげなければならない問題であったわけですよね。

　そういう意味で最近内航コンテナーの問題がとりあげられてきたのです。頼むは内航船舶というわけです。となると神戸はますます内航船の専用発着場というものを考えなければなりません。ひとつあなた方にお考えいただきたいですね。幼稚園の子らが大担な絵を描きますね私たちがみるとそうでもないのに専門家がみるとりっぱな絵だとほめる。それと同じではないかと思います。

橋本　専門家にほめられる絵が描けるかどうですか(笑)

玉井　幼稚園の子らにたとえて、はなはだ失礼だが、私たちが描くものはまとまった絵であってしまう。他の雑念にとらわれない絵が描けるということが一番いいのではないかと思いますね。私達は五、六年前、コンテナーの問題を考えたとき、道路も港湾も、こうすべきだということをなぜ発言しなかったかという反省にとらわれてしまっているのです。ただたいへんな金がかかるということだけで、気はついていても不問にふしていたわけですよ。あのときはっきりしていればよかったのだが、そのときの反動が今きているのです。それであわてているのですが、アメリカは八年も前からやってもうけています。事実もうかるのです。過去にとらわれすぎて思い切ったことがやれない。ちょっとちゅうちょするところがあるのです。あなた方にはひとつ大胆な構図を打ち出し

てもらいたいですね。

橋本　話はかわりますが、神戸市とタイアップの形をとった神戸商工貿易センタービルの構想がありますね。地上三十階とかいう相当大きな構想と聞いておりますが。

玉井　今の商工会議所の建物では人があつまりませんからね。会員から会費をとって、会員が話し合う場所もないというのはだめです。浅田会頭と話し合って、会議所の生き方としてある程度の経費増を会議所自体の仕事によってまかなえる組織に変えて、会員に負担をかけないようにしようということになった。そこでたまたま開港百年祭記念に貿易センターを摩耶ふ頭につくりたいという神戸市と一緒になって、建てるならすばらしいものを建てようではないかということになり、会頭と市長会談の結果、一致したわけです。

★交通公害対策に万全を

滝川　今度、公安委員のお仕事もなさると聞きました。警察の仕事が交通問題だけではないと思うのですが、やはり最近では交通問題が非常に大きなウェートを示しています。そういった交通公害が社会問題だといわれて大分たつわけですが、その対策はどういう風にお考えになりますか。

玉井　これはけっして車だけが悪いわけじゃない。人の問題が半分、人の問題のなかには運転者の場合と、一般の歩行者との両方の意味からなるのですが、運転者がいくら注意しても事故は減らない。たとえば赤信号が出ていても手をあげて通りすぎる人がいますね。これははじめの指導が間違っているわけです。それから道路問題があります。先ほどからいっているようにコンテナーをも考えた道路、トンネルをつくっているかどうか、これは将来のつまり車のふえ方、人口のふえ方、都市集中などを考えた道路計画であったかどうかということなのです。この点でもあなた方の新しい考え方でどんどん改めていってもらいたいものです。

滝川　神戸ＪＣでも交通公害問題委員会がつくられてメンバーがあたり、いろいろ研究しておりますが、また意見をうかがわせていただきたいと思います。

橋本　過去2年間ぐらい、交通モニターというのをやってきました。それは交通の施設の問題とか、個々の問題について進言して改めてもらったこともあるのですが、今度特に委員会としてできましたので、もっと大きな立ち場でとりあげてみようと思っています。

玉井　私は六、七年前に書いた随筆のなかで、その当時年間六、七千人の人が交通事故でなくなっていました。仮にこれが戦争で一度に六千人の人たちがなくなったとしたら、政府はだまっていないでしょう。交通事故の場合は一日に何人かということでつみかさなっていくものです。一度になくなれば政府はこれに対処して相当な金額を考えなければならない。そういう意味のことでしたが、先日も幼稚園児が大勢、ダンプカーの犠牲になり大あわてしましたが、事故のあとでダンプカーを取締ってもなんにもならない。みんな対策があとあとになっているのですね。

滝川　新聞を見ましても事故のない日は一日もないという現状ですからね。私達自動車の商売をやっているものにとっては特になんとかいい事故防止策をいつも考えているわけですが、いい案が浮ばないんですよ。

橋本　日本の交通事故の特色は人と車ですからそれだけ犠牲も大きくなってきます。犠牲になった人が気の毒で一日も早く事故のない日がくることを願いますね。

玉井　残された遺族の方たちも、また犠牲になった人が小さなお子さんだったら、将来、どんなに国のために役立つ人になったかも知れない。そう考えればその家にとっては、また国にとっても無形の損失であるわけです。防止策については各都市ともいろんなことを考えているが、それらを参考にしてもいいから、私たちも明日にでも尊い生命を助けるために早くみんなの意見をまとめて万全の防止対策をとるよう努力しましょう。（文責編集部）

経済ポケット ジャーナル

★ロッテルダム港とも姉妹港提携

神戸港開港百年を記念して五月シアトル港と世界で初めて姉妹港提携する神戸市はオランダのロッテルダム港とも同時に提携することに決まった。ロッテルダム市は人口約七十三万人。年間貨物取り扱い量一億二千万㌧（ニューヨーク港八千万㌧、神戸港四千万㌧）と世界一の港湾を誇るロッテルダム港は、ECの経済幹線といわれるライン川河口に位置し、バージライン（押し船方式の輸送）システムによる港湾貨物輸送の基地。瀬戸内海開発にバージライン構想を主張する原口神戸市長が数年来提携を希望していた。提携後はコンテナ輸送では先輩に当たるロッテルダム港の技術をアドバイスしてもらうほか、摩耶ふ頭に計画中の港湾労働者学校も同港のそれを参考に建設する。

世界最大のロッテルダム港

★ハリマ繊維センター敷島紡績と業務提携

団地協同組合ハリマ繊維センター（兵庫県加西郡泉町、組合員二十二社）は敷島紡績（室賀国威社長、資本金二十二億五千万円）と業務提携の話し合いを進めていたが、敷紡が城北工場（大阪市都島区）の広幅織機三百五十六台を同センターに貸与、シーツ地など月間三十三万六千㍍の広幅織物の製織を委託することになった。織布部門の大幅合理化を図ろうという敷紡のねらいと、提携して経営安定を図ろうというセンターの希望が一致したもので、経営の思わしくない中小企業工場団地の新しい行き方として注目される。正式契約とともに同センター敷地内に新工場建設にかかり、四月には一部操業にかかる予定。

★沖縄にマッチ合弁会社

マッチ業界最大の輸出先である沖縄市場を維持するため日産農林工業（本社東京、工場姫路）など大手五社が同市場に合弁会社をつくる計画を進めている。四十年中の沖縄市場向け輸出は、米国向けの四千二百八十二マッチ㌧を抜く五千五十五マッチ㌧で第一位。

このため同業界は沖縄向け輸出には気を配っており同市場関係五社の輸出取り引きについては日本共同マッチ株式会社（海外市場開拓と業界近代化の推進機関として八十二社で構成）が契約主となり輸出価格をチェックしている。しかし最近国内市況が混乱、同市場向け輸出価格も大幅に値下がり、沖縄ではマッチの自給機運が高まってきたため業界は日本共同マッチの指導で各社の利害を超えた対策に乗り出すことになったもの。

★〝にがい〟のは花見酒か清酒値上げの動き

酒どころ神戸の灘五郷、京都の伏見などの酒造会社は値上げの動きをみせている。値上げ幅は一・八㍑当たり特級酒六十円（現行九百九十円）、一級酒五十円（同七百十円）、二級酒四十円（同五百九十円）になる模様。同業界は①原料の酒米が四十年、四十一年の二度にわたり六十㌔当たり千百八十二円値上げされたが清酒値上げは見送られた。②人件費、運送費、ビン代、木箱代などが上昇している。③二年間の価格据え置きによるしわ寄せは約八十億円にのぼり合理化だけでは追いつかない――などを値上げの理由にあげており、すでに国税庁に対しその旨要望をかさねている。諸物価高騰の折から左党には「酒よお前もか…」とうらめしい話だが、値上げの時期はどうやら暗雲たれこめる国会の解散―総選挙のすぐあとと見られ、〝にがい〟のは花見酒ということになりそうだ。

＊KOBEオフィスレディ＊

木戸弘子さん（21）
神戸眼鏡院社長室勤務

市立湊川高を卒業、入社して1年になる。英文・和文タイプなど積極的にマスターして社長秘書の仕事にもすっかり慣れたという。

趣味はジャズを聞くこととドライブで、ジャズにいたっては、結婚するまでにはぜひアメリカへ行って本場のジャズをききたいというたいへんなファン。3人兄姉の末っ子だがしっかりした性格の持ち主。

二月は木枯らしの吹く季節
若いあなたの装いに、毛皮の
ベレーは暖かさをそえます

全国著名百貨店で
ご覧ください

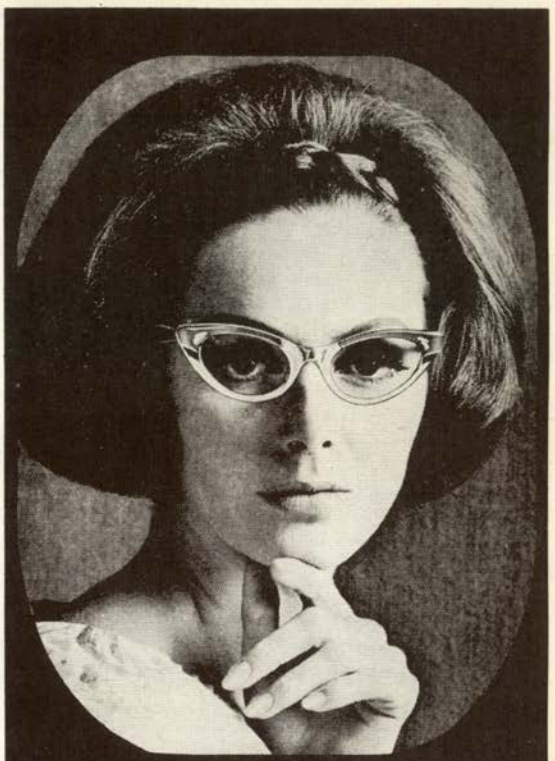
婦人帽子
マキシン
神戸・トアロード TEL(078)33—6711—3
東京・銀座3—2 TEL (03) 535—5041

YÜHAIMU CONFECT

バウムクーヘン
〈ピラミッドケーキ〉
クッキー
ムンデット
シモン
デビルドチーズビスケット
各種高級洋菓子

北欧の銘菓
ユーハイム
コンフェクト

本社・工場／神戸熊内町1丁目　TEL22－1164・9865
熊内店／（市立美術館東隣）
三宮店／神戸三宮生田筋（階上喫茶室）　TEL33－7343・0156・4314
神戸デパート店／長田区大橋5丁目　TEL 61－2101
甲子園店／国鉄甲子園口駅（北口）・芦屋店／国鉄芦屋駅前通・堂島営業所／大阪堂島中町ビル地階・梅田店／大阪梅田地下センター・栄町店／名古屋栄町ビル地階・千種工場／名古屋千種区若水町・大丸店／神戸、京都・阪急店／神戸、大阪・三越店／神戸・丸栄店／名古屋・オリエンタル中村／名古屋・大阪国際空港・神戸鉄道弘済会・丸物店／豊橋・松菱店／津・姫路駅デパート



★世界のめがね
光学品豊富品揃★

服部メガネ店
大丸前　TEL（33）1123

●パイオニア神戸――

2 呉錦堂

川辺賢武

神戸に在住した中国人で、実業家として名をあげ、相当の事績をのこしているのは「呉錦堂」であろう。

「経歴」

呉錦堂は安政二年（一八五五）九月に、浙江省寧波府慈谿県で、呉麟動の長男として生まれた。初めは家業の農・商を手伝っていたが、長じて上海に出て商家に奉公して商売の道を覚えた。明治一八年（一八八五）三一才のとき長崎に渡来、のち大阪へ行き、川口で雑貨商をしている知人を頼って寄食し、その店の品物をかついで毎日行商して町を歩いた。そのあいだに多少のたくわえができたので、志を決めて神戸に来て、貧弱ながら貿易商を開いた。はじめは雑貨を扱っていたが、呉錦堂合資会社と改めてから、次第に輸出入の商品の範囲をひろめた。そのうちマッチ、綿花、穀類などが主なものであった。

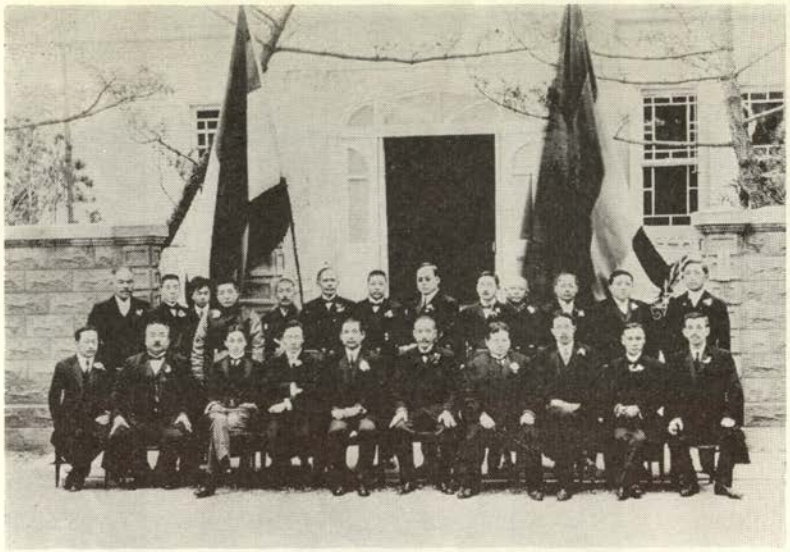
元来中国人は商才に富み機略に長じ、しかも蓄財には特別の才能があるようにいわれているが、とにかく彼はしばらくのあいだに財を積んだらしい。以前は日支貿易といっても、神戸にいる中国人との取引きに過ぎず、中国本土との直接なものではなかった。

彼は中国へ商品が運送されるときには、自分も便乗して出かけ、中国の事情や欲求希望するところを知って商売をしたからソツがなかった。

日露戦争中に、日本政府は分捕品の多数の船を民間に払い下げたとき、彼はドイツ船の原名「ARGO」（一、

四二七トン）を買入れ、「錦生丸」と改めている。当時は海運に経験のないものまでが、御用船に雇い上げられるのを目的で、投機的に買い入れるものが少なくなかったが、彼は商品の運送に利用した。

そのころ三井が鐘紡株を手放そうとしたので、鐘紡兵庫工場の武藤山治から株の買い取り方の交渉をうけて、さっそくこれを引受けた。ちょうど日露戦争が終って、株価が暴騰しはじめていたので、彼は手をぬらさずして大部分の株を自分のものにしてしまった。そして鐘紡の取締役になって武藤に協力した。その後、彼の思惑によって自由になる鐘紡株を操作して利食いしていたことは事実であろう。しかし世間でいわれているように、このために呉錦堂は巨利を博して、発展の基礎をなしたというのは思い過ぎで、それまでに、すでに鐘紡株の大部分を買い取るほどの蓄財ができていたとみねばなるまい。



前列左より3人目戴天仇、5人目孫文、6人目呉錦堂、9人目滝川儀作、後列3人目呉敬藩（陳徳仁氏所蔵）

ところが、東京の株式界の惑星といわれた鈴久（鈴木久五郎）が、鐘紡の乗取り策を画して鐘紡株を買いあさった。売りに回った錦堂と対決して血みどろの競り合いの結果、錦堂はついに鈴久の前に屈し、鐘紡は鈴久の自由にまかすところとなり、武藤もやめた。

しかし錦堂は武藤のあっせんで、三菱銀行の救済融資を得て救われたが、相手の鈴久は無理がたたって株の暴落にあい、持株は債権者の安田銀行に取られてしまい、鐘紡から手を引き、一度鐘紡を追い出された武藤は復帰することになった。これは「鈴久事件」として有名である。このため神戸に呉錦堂ありと、全国的に知られるようになった。

こんなことから呉錦堂を投機好きの成り金のように記したものもあるが、これは彼の一面で、本来はやはり事業家で、明治三七年（一九〇四）一月二五日、日本に帰化してからは、日本で一流の実業家と肩をならべて、日中貿易の隆盛に貢献するところが多かった。のちには東亜セメント、小野田セメント、大阪メリヤスなどの大株主となったが、謙そんしてなかなか重役にならず、東亜セメントなどは全数の七割の株をもっていたが、なお平取締役に甘んじていたほどである。その他関係した事業に尼崎セメント、兵庫電鉄、東洋マッチなどがあった。その間、中華会館理事長、中華商業所会頭として関西実業界に重きをなした。金もうけに上手であったという呉錦堂は、また公共事業にもよく尽して、六回も銀盃や褒章をうけている。

また育英事業にも心を寄せ、一〇数万円の私財を投じて郷里に呉錦堂学校を建て、神戸でも華僑の同文学校を

建てるときにも協力を惜しまなかった。その後にできた華僑学校や中華小学校にも、それぞれ援助を与えている。彼は学歴をもたなかったが、ひとかどの実業家となってから、家庭教師を招いて必要な学問を修めていたそうである。

呉錦堂の事績は数多いが、そのうち実質的に残っているのは小束野の開拓であろう。彼は日露戦争後、兵庫県下で果樹園の経営を思い立ち、県のあっせんで、当時の明石郡神出（現在の神戸垂水区神出町）小束野、雌岡山の西ふもとの土地を手に入れた。しかし立地条件が水田に適していたので、果樹園の計画を水田にかえた。

そのため中国から二、三十人の人夫をよび開拓に従事させた。付近の古老の話では、そのうちの一人は、日本人の一人とともに監督にあたり、ほかのは普通の労働者に過ぎなかった。はじめは松林の松を切り出したが、その材でセメント樽の加工をしていた。当時彼は、尼崎にセメント工場をもっていたからで、そのため神出に製材所を二ヵ所つくっていた。

その一方では土地の開拓、ため池の築造、水路、農道などを設けた。これらの従業員は付近にバラックの家を建てて住まわせていたので、一般からは「支那人部落」とよばれていた。そのころ縦、横の農道を幅三メートル以上にもつくったので、みんなは無駄なことをするもんだとあきれていたが、それがのちに非常に役に立ち、農機具や収穫物の運搬トラックも自由に通行できて、仕事がはかどるので、錦堂の先見の明に敬服したという。

土地の開拓が一応終ったのは大正六年ごろ、それで本国から来ていた中国人を帰国させて、翌七年に水田の耕作する人たちを招いた。入植者は主として神出村で山田村（兵庫区）その他の村からであった。そのために二一

昭和32年5月神出町小束野部落民一同によってたてられた呉錦堂の顕彰碑

戸の家を建てて住まわせたので一部落となった。

それから部落民は、原始的な鍬一つをもって、血のにじむ努力を続け、大正一五年には五〇町歩の水田を作りあげ、さらに昭和五年ごろまでに一〇町歩を増して、当初計画一〇〇町歩の六〇%を完成した。しかしそののち入植者の努力で、さらに八町歩を拓いて現在に至っている。今では戸数も七〇戸余（一戸平均五・八人）の部落となっている。

この開墾地は大正一五年呉錦堂が死んでからは、令息の呉敬藩の所有になったが、数年後に権利を他人に譲ってしまった。しかし従来の小作人には不安を与えなかった。ところが戦後の昭和二一年二月と九月の農地改革で、この土地は小作人の手に移ることになった。

小東野部落民が、呉錦堂を徳としていることは、錦堂が莫大な費用を注ぎこんで、山林を開拓して水田とし、池を造り、住宅を建てて小作人を無償で住まわせ、その結果は農地改革によるとはいえ、事実上の農地の地主となることができ、その恩恵は今におよんで平和な生活を送っているからである。

昭和三二年一〇月三日、部落民一同は名をつらねて、小東野の中心地に呉錦堂の徳をたたえた銘文を刻んだりっぱな顕彰碑を建てて、感謝の真心を示すとともに、部落の青少年たちに呉錦堂が一介の行商人から刻苦して、大実業家に立身した行跡を見習うことを教える手本とした。それ以後、毎年建碑の日には「顕彰碑まつり」をやっている。

立志伝中の人呉錦堂の晩年は、病気で神戸葺合区籠池通りの本宅で療養中、急性肺炎を併発して、大正一五年一月一四日世を去った。七二才であった。遺体はそのまま保存されていたが、昭和六年四月故国におくられた。

呉錦堂の別荘舞子の八角堂

しかし墓は神戸垂水区名谷町猿倉（垂水ゴルフ場東）の垂水共同墓地に、先祖や一族の墓とともに建てられている。

大正六年、松の名所の舞子海岸、絵のような淡路島を眼前にながめ、大阪湾の向うに紀泉の山々を遠望する景勝地に別荘を建てた。主要な建て物は三階建ての八角堂で、八方に窓があり、どの窓からも眺める景色は、それぞれ趣きが違っていて、思わず見とれてわれを忘れるというので「移情閣」と命名したといわれている。

一階と二階のシャンデリアの上の天井には、円形のなかに中国風の見事な彫刻がある。一階のは竜のデザインで、黄金が一貫目（三・七五キログラム）も使ってあり、金色まばゆく光っている。二階のはボタンの花で、全部がサンゴでできているぜいたくなものである。八角堂の西に接して、もと別棟の居間や食堂などの建て物があった。ここで孫中山の歓迎を開いたこともあったし、客の接待用であった。

この建て物を設計建築したのは、明治の異人館を建てて名をのこした英人建築家ハンセルの弟子で、県下豊岡生れで神戸にいた横山栄吉であった。周囲は鉄筋入りレンガ積みの外側をセメント塗りとしたもので、特に海岸であるために基礎工事には、意外の費用をかけて強固にしてあるという。

呉錦堂が、どうして舞子を選んで、こんな建て物を建てかということであるが、これは武藤山治が八角堂のすぐ東に住宅を建てていたから、彼とは親交のあった武藤の勧めによったものではないかと推察される。

（神戸市史編集室）

神戸っ子にはお菓子通が多い
その鋭い舌感を
永年、魅了し
つづけている
この「味」と
香り……

風月堂
ゴーフル

神戸にそだって 70年
風月堂
元町3丁目 TEL㊴2412～5
さんちかスイーツタウン TEL㊴3455。

あなたのおしゃれのポイント
神戸眼鏡院のメガネ

おしゃれ メガネの
神戸眼鏡院
元町店・元町3丁目 ☎㉝3112代
三宮店・さんちかタウン ☎㊴1874～5

伸びゆく 菊水總本店
瓦せんべい

創業明治元年

株式会社
菊水總本店
TEL (35) 1801 (代)

ステレオデッキの本格派
ステレオテープデッキRS−766u
＊録音・更生用プリアンプ内蔵
＊酷使にも立派にたえる永久機構
＊周波数特性は抜群
＊テープ自動停止装置
＊4ポールモーター

ナショナルテープレコーダ
ゴールドメカ・デッキ
現金正価￥38,000・月賦正価￥41,100

あらゆる電化製品の店
元町電機
元町6丁目 TEL(35)0081〈代表〉・4